



### 瀬戸神社境内末社

## 左末社・右末社ならびに青麻社の修造



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りさせていただいてゐる大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

瀬戸神社の境内には御本社の拜殿、本殿、幣殿のほかに、小さな御社殿がいくつかあります。特に目を引くのは、御本殿の向かつて左側に二社、右側に一社の同じ形の小さい社殿が三社あることです。

境内にある小さな社は一般に「末社」といはれ、これらは瀬戸神社の「末社」です。それぞれ名称があり、「左末社」「右末社」「青麻社」と称します。

左右末社の由緒は前号で解説しましたが、今般、この三社を改修しました。御屋根はこれまでペンキ塗りのトタン葺きでしたが、銅板葺きに改めました。また御扉も檜材でそれぞれ作り替え、壁板や土台の傷んだ部分も改修しました。

工事は木村工務店が担当し、九月末日までにそれぞれ竣功することができました。

(青麻社の由緒は四面)

#### 平成二十九年祭事曆

- ◎ 一月 一日 歳旦祭  
鶏鳴神事
- ◎ 三月二〇日 春季大祭  
祈年祭・合祀神例祭
- ◎ 五月十五日 例大祭  
神社本廳献幣使参向  
琵琶島弁天社へ神輿渡御
- ◎ 四月二十九日 昭和祭
- ◎ 六月三〇日 大祓式  
大祓人形納め・茅の輪神事
- ◎ 七月 九日 天王祭出御祭  
本社神輿御霊入・宮出渡御
- ◎ 七月一日 三つ目神楽  
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 七月十六日 天王祭巡幸祭  
天王神輿町内巡幸
- ◎ 七月二十三日 手子神社例祭
- ◎ 九月 一日 浅間神社例祭
- ◎ 九月一七日 熊野神社例祭  
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一〇月一五日 手子神社秋祭  
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一一月二三日 秋季大祭  
新嘗祭
- ◎ 二月 八日 歳の市  
開運熊手授与
- ◎ 二月二十三日 天長祭
- ◎ 二月三十一日 大祓式  
大祓人形納め・古札焼納式
- ◎ 毎月 一日 月次祭

毎月一日の朝八時三十分 ご参列ください

## 月次祭と神道講話

瀬戸神社では、毎月一日に「月次祭」(つきなみさい)を執行してをります。時刻は午前八時三十分からで、祭典後には宮司が毎回神道講話をいたします。講話の概要は「月次のしをり」に印刷して参拝の皆様にお頒ちしてをります。

九月より十一月のしをりを再掲しますので、お目通し下され、是非、月次祭にご参列下さい。

ご参列の方には月ごとに色の変わる「月次御幣」を授与いたします。

なほ、新年は一月三日に元始祭として執行になります。

### ●九月のしをり

「心は神明の御舎」(こころはしんめいのみあらか)

江戸時代の伊勢神道の学者として知られる度会延佳の「中臣祓瑞穂鈔」の中に記されることばです。伊勢神道の根本神典とされる五部書のひとつ「宝基本

紀」には「心は乃ち神明の主」と表現されてをります。人はだ

れでも神の分身を自分の中に宿してをり、それがこころであるといふ認識です。またそれが正直の根源でもあります。「こころ」といふ存在に「かみ」のはたらしきを感じ取り、「ひと」すなはち

「自分」の存在意義を思索したことばでありませう。西洋の哲学に比較すれば、「吾おもふゆゑに吾あり」にもどこか通ずるものかもしれませんが、「かみ」と「ひと」とがひとつの靈性を共有してゐる感覚は、一神教の觀念とは相違してをりませう。伊勢神道は鎌倉時代に盛んになった神道説で、地方の武士にも伊勢信仰が広まりました。江戸時代の度会延佳以降は、町人庶民にも広まりました。また山崎闇斎など儒学者の神道説にも取り入れられました。闇斎は「神前に参れば、もはや向かうに神は御座なされぬ。則ちこの身に御

朝比奈町鎮座

### 熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひます。仁治二年(一二四一)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年(一六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結果して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣功して今日に至つてゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのつとつた湯立神楽が今も続けられてゐます。

谷津町鎮座

### 浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まった中で当地にも勧請されたものでせう。

ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かつたと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土日曜)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年(一四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

座なざる。」と言つてをります。「こころ」の大切さだけでなく、神性の故にこそ、「ひと」のあるべき姿、尊厳と使命、「こころざし」の大切さも説かれました。

### ●十月のしをり

#### 「五色絹」(しきのきぬ)

神社の御神前にはさまざまな威儀物が奉安されてをります。そこに盾や矛とならんで真榊があります。これには左右に鏡と玉、剣とともに五色絹が掛けられるのが普通です。この五色は「青・黄・赤・白・紫」の絹がこの順に重ねられてゐるのが慣例です。この五色は大陸の五行の考へに起源がありませう。五行では「木・火・土・金・水」が基本の元素でこれが循環してゐます。そしてこの五行を表す色が「青・赤・黄・白・黒」とされます。わが國の風習では、赤と黄の順序が入れ替はり、黒の意で紫が使用されるのが慣らはしとなつてゐます。

この五行の五色は、方位では青が東、赤が南、白が西、黒が北で、それぞれ「青龍・朱雀・白虎・玄武」の四神が方位の守

護神で、黄は中央の色とされます。また季節(暦)では春が木(青)、夏が火(赤)、秋が金(白)、冬が水(黒)となりませんが、土(黄)は四分割して各季節の合間に振り分けられます。これが土用です。夏の土用だけが鰻を食べる日として話題になることが多いのですが、秋・冬・春の土用もあります。十月二十日が土用の入りで十一月八日の立冬の前日までが土用です。

### ●十一月のしをり

#### 「信倚」(しんい)

本年八月に、天皇陛下にはおことばをテレビを通して仰せになられました。その中で「私はこれまで天皇の務めとして、何よりもまず国民の安寧と幸せを祈ることを大切に考えて来ました」とおつしやつてをられます。今月は新嘗祭ですが、このお祭が単なる豊作感謝でないことがこのおことばからも知られませう。さらに「我が国における多くの喜びの時、また悲しみの時を、人々と共に過ごして来ました。」「人々の傍らに立ち、その声に耳を傾け、思いに寄り添う

ことも大切なことと考えて来ました。」とも仰せです。このおことばは、昭和天皇の終戦の詔に「朕は茲に国体を護持し得て、忠良なる爾臣民の赤誠に信倚し、常に爾臣民と共に在あり」とあるのと内容的にまったく相違はないものと存じます。漢文調で「信倚」といふのは、口語調では「思ひに寄り添ふ」といふことでせう。

しかし陛下が「思ひに寄り添う」つていただけるといふことは、私たちもその「おほみこころ」により深くおこたへしなくてはならぬといふことになります。陛下は「地域を愛し、その共同体を地道に支える市井の人々のあること」の認識が「国民を思い、国民のために祈るといふ務めを、人々への深い信頼と敬愛をもってなし得た」ともおほせです。恐れ多いことですが、市井の中での地道な努めが「おほみこころ」を安んずる根本にあることを知るべきでありませう。そして陛下も国民も一体となった相互の「信倚」にこそわが國のとしへの安寧の基があるものと存じます。

#### 釜利谷町鎮座

#### 手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守つて行はれます。

境内の洞窟にお祀する竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されてゐます。

## 瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起原で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの霊域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にまで信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教学人となり神奈川県神社廳整使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行われました。

## 御祭神

## 大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

## 須佐之男(すさのを)の命

配佐の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追ひ祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれます。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

## 菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらっしゃるようです。

## 「青麻社」について

境内末社の「左末社」「右末社」については、前号「みたまのふゆ」(五月十五日号)で説明しましたので、今回は「青麻社」について説明させよう。「青麻」は「あおそ」と読みます。

当社に残る江戸時代の由緒版木には「青苧明神」と表記されてあり、この青苧明神の神は、往昔、三光を祭る時に青麻の幣を捧げて国土の栄えを祈る「三光感応成就」のことを司つたこととす。三光とは「日・月・星」のことで、神仏習合では「大日・不動・虚空蔵」に当てられます。アオソは「からむし」とも呼ばれるイラクサ科の植物で、古来、麻と並んで繊維の原料でした。現代も小千谷縮や越後上布などの材料です。

宮城県仙台市に青麻神社があり、その神職の鈴木家の古伝では、先祖の徳積大人が京都からこの地へ来て、青麻を植えることを土地の人々に教え、また三光神を奉齋したのが、青麻神社の始まりとしてをります。

この青麻神社では、江戸時代

になって、義経の従者であった常陸坊海尊が何百歳にもなって仙人となつて生きてゐたといふ伝承が広まり、長命中風や酒の害に御利益ありと参詣者で賑はつたといふことですが、先述の当社の版木由緒にも「この神、よく酒を嗜み給ふ。ゆゑに世俗のよく酒興の程を越すとはいへども害せられざること奇妙、もつて病難を避け長寿のことを祈りたまふ」との記述があります。

仙台の青麻神社には仙台藩侯はもとより南部藩、尾張藩、土佐藩ほか全国的に武家が病氣平癒をした記録が多数あります。

当社境内末社の青麻社も、やはり江戸時代に同様の信仰から造営されたものと推定できますが、高齢化の今日には、酒害のみならず認知症・寝たきり予防の御利益もあることと存じます。ご祭神は大己貴命・少名彦命の二柱です。

## 瀬戸神社

〒三六一〇〇三七

横浜市金沢区瀬戸十八一十四

(電話) 〇四五七〇一一九九九二

(FAX) 〇四五七〇一一九九九四

<http://www.setofujia.or.jp>